

文化財の保存と修復
ヨーロッパの修復事情

川口 法男

CAROLI PETRI THUNBERG
MED. DOCT. PROF. REG. ET EXTRAORD. ACADEM.
CAES. N. G. REG. SCIENT. HOLMENS. SOCIET. LITTER.
VPSAL. PATRIOT. HOLMENS. BEROLIN. N. SCRVT.
LYNDIN. HARLEMENS. AMSTELDAM. NIDRO-
SIENS. MEMBRI

F L O R A
I A P O N I C A
SISTENS
P L A N T A S
INSVLARVM IAPONICARVM
SECVNDVM
SYSTEMA SEXVALE EMENDATVM
REDACTAS
AD
XX CLASSES, ORDINES, GENERA
ET SPECIES
CVM
DIFFERENTIIS SPECIFICIS, SYNONYMIS PAUCIS,
DESCRIPTIONIBVS CONCINNIS ET
XXXIX ICONIBVS ADIECTIS.

L I P S I A E
IN BIBLIOPOLIO I. G. MÜLLERIANO
1 7 8 4



C.P.Thunberg

ツンベルグの名著「日本植物誌」(1784,初版本)の表紙

与え、日本の科学の実態を教えた。ツンベルグは、この二人の優秀な能力に驚嘆した。この二人は、後に杉田玄白等と「解体新書」の翻訳刊行に参画した。ツンベルグの「日本植物誌」は、ドイツの日本研究者のシーボルトによって、コピーの1冊が伊藤圭介に贈られ、伊藤はこれにリンネの「植物分類表」を付して、1828年「泰西本草名疏」を刊行した。なお、伊藤は、後年東京帝大教授となり、日本最初の理学博士となった。若き同僚の1人に牧野富太郎があった。

ともあれ、事ほど左様に、記せば尽きぬ数多くの世界の至宝の資料が大切に保管され、これ等の珍宝がすべての人々に差別なく情報公開され、研究・教育の発展と科学の普及のために供されている。

スウェーデンの名城—ウプサラ城を眺む伝統あるウプサラ大学キャンパスの一角に、アテネのパルテノン神殿に模して建てられている博物館・資料館、そして、附属植物園は、まさに世界の至宝である。

金沢大学資料館の在るべき姿の一例ではある。金沢大学資料館の更なる充実と発展とを大いに期待したい。

(金沢大学名誉教授・金沢経済大学教授)

私達の海外修復施設視察の第一歩はロンドンから始まった。ヒースロー空港のロビーには京都時代の同僚フィリップ・メレディス氏の懐かしい顔があった。彼は京都での長い修行期間を経て、数年前からオランダのライデン国立民族学博物館で東洋美術部修復センターの所長をしているのだが、わざわざここまで足を運んで出迎えてくれたのである。

空港を出てバスに乗り込んだのは午後4時半頃だったが、2月のロンドン郊外はすでに夜の闇に包まれていた。ホテルに荷物を置いて軽い夕食をとるために街にでる。オレンジ色の街灯がとても印象深かった。そのやわらかい光の中では人の歩みも非常にゆっくりしたものを感じられた。その日は長旅の疲れのせいか深い眠りにおちた。

翌朝、フィリップ・メレディス氏に案内してもらい最初の視察先であるThe British Library (大英図書館)を訪れる。この図書館は大英博物館にその基礎を置いている。大英博物館開設の百年後、すなわち1853年に同館内に図書館が設けられたが余りにもその規模が増大したため、1973年に英国初の国立図書館として独立した。日本美術の収蔵品の大半は姉妹館であり母体でもある大英博物館が所蔵しているが、大英図書館にもフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトが日本からもち帰った写本・版本・地図などが3000冊以上、その他に住吉如慶筆の「源氏物語画帖」や桃山時代に描かれた「伊勢物語図会」「百合若大臣絵巻」といった名品が所蔵されている。

大英図書館の修復室内部は私達の目にはとてつもなく広く感じられた。実際5人ほどのスタッフが充分すぎるほどの広さの中で修復作業をおこなっていた。主任のマーク・バーナード氏は人なつっこそうな笑顔で私達を案内してくれた。このスタッフに混じって日本人女性の松岡久美子さんが保存科学者然とした姿で立ち働いていた事は、彼女の情報を知らなかった私達には意外であり、頼もしくもあった。ここで見せてもら



大英図書館修復室

った修復品はスタイン博士がイギリスにもたらした敦煌関係のものがほとんどであった。卷子装にされた敦煌経はまさしく和紙でもって裏打ちの技術が施されていた。併しこれも日本の修復技術がこの図書館でも踏襲されているからに他ならない。数多い敦煌經典の中にはかなり昔に応急処置を施されたものも少なくないが、それらのものはハトロン紙のようなもので見るも無残に糊付けされている。当然の事ながら昔のヨーロッパ人は東洋の美術品を所持してはいても、その製作過程を知らないが故に修復する事もままならない。彼等に為しえた事は破損した所を固い糊や合成糊でがんじがらめにする事だけであった。だがそれは皮肉にも傷んだものを更に傷める結果にしかならなかった。ところが今から20年程前に私達の大先輩であるイギリス人や日本人が保存修復の技術をこの地にもたらした。特に日本に於ける裏打ちの技法というものは熟練を要するのみならず、糊の濃度というものに非常な重きを置く。つまり接着可能なギリギリのところまで濃度を



おとす事でよりソフトに仕上げる事ができるというわけである。これを無視すると保存修復の要ともいえる可逆性の問題に背を向ける事になる。文化財は一度修復されたらもうそれでよいという質のものではない。例えば私達の手掛ける絵画や書蹟の場合、長くても150年~200年で次の修復の時が巡って来る。その時に劣化した作品本体に補強材がガッチリとくっついていれば当然弱い方が先に壊れていく。つまるところ作品そのものは消え失せて、補強材が文化財の代わりをする事になる。やはり私達の仕事はすごい・・・という事には決してならない。ここに可逆性の問題の所以がある。極端に言えば文化財修復では補強材が先に壊れる方が理想なのである。とはいっても私達の選ぶ和紙は相当に強い。そこで媒体としての糊の濃度が重要になってくる。実際紙と紙を接着する場合に私達はかなり薄い糊を用いるので、初めて裏打ちを経験する外国の修復家達は一様にその薄さに驚きの色を顕すほどである。

ところで大英図書館で修復された敦煌経は私達の目の前で実にしなやかに開かれていった。おそらく正しい裏打ちの技術がここでも生かされているのだろう。そしてそれは彼等が考案し製作したという太巻軸に巻かれていた。又、經典の断簡などはエチレンシートに挟みこんで周囲をミシンで縫うという方法がとられていた。これによって外気は遮断され中の文化財は保護される事になり、展示や取り扱いも楽になる。そして取り出したい時にはミシン目をはずせばいつでも出して見る事ができるのも利点である。大英図書館の修復室では保存科学と伝統技術がほどよく駆使されているようだ。

(金沢文化財保存研究所所長)

